

自然と文化、芸術を親子で体感して 日本の豊かさをたっぷり味わえる文化祭に発展。

親と子がふれあいながら、日本の自然と文化、芸術に触れることをめざして、公益財団法人 日本文化芸術財団が開催している「創造する伝統 社の中の文化祭」が2010年度も行われた。毎年来場する親子や主旨に賛同して自校でのイベントにも取り入れたいという教師など、賛同者も確実に増えている。

遊びの中に子どもの心に必要な 栄養素が詰まっている。

2010年9月26日、明治神宮の参集殿には多くの親子が集まった。その目的は「社の中の文化祭2010」への参加である。このイベントは日本の自然や、普段はなじみが少ない文化や芸術を親子で体験して、日本の良さを再確認するというものである。

メイン会場となったのは明治神宮の参集殿である。ちょうど体育館のような施設だが、その中央の位置にお琴を習うための畳を敷いたステージを作り、周りを取り囲むように、さまざまなワークショップが並んだ。

あめ細工、江戸風鈴の絵付け、江戸木版画の摺り体験、江戸糸あやつり人形、などなど。子供たちは巧みの技をみては歓声をあげ、自らがチャレンジしては大はしゃぎだった。あめ細工はその場で食べてもいいのだが、持ち帰るほ

ど大切に扱っていた。

また遊びの広場では折り紙や風車、お絵かき、けん玉など懐かしい遊びがいっぱいである。

文化祭を主催している公益財団法人 日本文化芸術財団の前川千恵子さんは

「糸電話が人気でしたね。『声が聞こえた』と叫んでいま



江戸木版画など伝統技術を体験できる



子どもたちに人気のあめ細工コーナー



日本の自然と文化、芸術に触れることが出来るイベントとして毎年来場者が増えている

した。今の子どもは糸電話を知らないのですね。親御さんは知っているから、いい会話ができたようです」と語った。

この会場レイアウトは初めての試みであったが、ワークショップがすべて一つの場所に集まることで一体感が増した。午前と午後に1回ずつ、こども向けの短編映画を上映したが、他のイベントに参加していた親子たちもしばし手を休めて映画を見入るという感じで、来場者がより多くの経験ができた会となった。

初めての参加者には、昨年来場した方の口コミや同行してきたという方が増えている。

「こういうイベントが各地であるなら、子どもの育成のためにも役立つのに」と語る人は多い。日本が失いかけている遊びや文化の中に、子どもの心の育成に必要な栄養素が詰まっているのである。

目の前で演奏されるお琴の演奏に子どもたちは呆然。

今回の目玉はお琴の演奏とそれに続く「お琴に触ってみよう」という企画。お琴を用意して、先生方がまず演奏をするのだが、子どもたちにはどんなに接近してもいいというルールなのである。初めて間近で見るとお琴の音量や先生の手や指の動きに、子どもたちはしばし呆然という様子だった。一方の先生方にとっても、すぐ目の前に子どもの顔が並ぶ中での演奏は初体験だったが、接近したことで緊張感と愛情をもって演奏することができたそうだ。

「吉村七重箏研究所の先生方に演奏をお願いしました。一流のものに身近に接するということが当初からのコンセプトですので、そこはきちんと守っています」と前川



明治神宮の杜を散歩する子どもたち

担当者より



伝統の遊びや芸術、
遊技業にも通じる
接点があります

公益財団法人
日本文化芸術財団
前川千恵子さん

かぶりつきで演奏を見ている子、子どもといっしょに折り紙に興じる親。伝統の遊びや芸術は子どもにも大人にも必要なものなんだと確信します。AJOSCの母体である遊技業の方にも通じる接点があると感じます。今回の助成に感謝し、今後のご活躍に期待します。

さんは言う。

また「切り絵で団扇を作る」という企画も大好評で、材料実費ながら多くの子どもたちが参加して自作の団扇を持ち帰った。伝統とは古いことではなく、子どもたちにとっては新しいものであり、また必要なものなのかもしれない。

ちょっと外に出ると、「日本のお茶を飲んでみよう」という野点のサービスもある。明治神宮の深い杜を見上げながらいただく抹茶の味わいは格別で、毎年大人気のイベントとなっている。

さらに明治神宮の杜をひとめぐりする「杜の探検」も子どもたちは大好きだ。今回はたまたま訪れたボーイ&ガールスカウトの皆さんも参加して、東京の真ん中の大自然を満喫した。

ボーイスカウトたちを引率していた学校の先生は、この文化祭の趣旨と内容を絶賛し、学校でも同様のイベントをするために、イベント参加の先生方と挨拶をするほどだった。

朝はオープニング前から文化祭に駆けつけ、夕方までたっぷり遊んでいった子どももいた。「来年も参加したいのでご案内をください」という親も多かった。参加者全員が満足し、このイベントを通じて、日本古来の文化の楽しさや子どもへの情緒的な効果を再発見する人も増えている。

この文化祭が今後どんな方向に向かうのか楽しみである。